

日伊ビジネスグループスピーチ原稿

昨年のベニス国際大学における会合で私は教育/文化をテーマとしたセッションの追加をご提案いたしました。

昨年の会合でも私は、「歴史とは変化の連続であり（Continuous transformation）、この変化に挑戦出来ぬ者は、歴史の舞台から退場せざるを得ない。この挑戦において良き伝統は継承し、イノベーションを日伊協力して進めることが、この日伊ビジネスグループの究極の目標である。」と述べましたが、その後のリーマンショックとそれに続く各国政府の対応をみるにつけ、この感をさらに強く持つようになりました。

各国政府はこの危機脱出のため、大規模な財政出動を行い、需要喚起を行っておりますが、単なる需要創造では過去の繰り返しにしかありません。まさしく、1972年にオリベッティ社のペッチェイ博士の主導するローマクラブが取り上げ、今や国際的にも喫緊の課題となってきた環境対策にも充分配慮し、持続的でスマートな成長（Sustainable Smart growth）を実現し、雇用を創造、物心両面で質の高い社会(Quality of Life)を実現することをその目的としなければなりません。

私が考えるに、イノベーションとは感性と技術の融合であります。古代ギリシャやローマでは芸術と科学技術は同ジャンルに属し、「テクネー」と呼ばれておりました。

イタリアと日本による感性と科学技術の融合について、私なりに配慮してきました。

例えば、私共の日本郵船のクルーズ客船の第1船 Crystal Harmony のデザインはジェノアのデザイナー Garroni 氏によるものであり、建造は、このたび、日本側次期会長となられる佃和夫さんの率いる三菱重工にお願いしたものです。

また、2030年までに現行比70%のCO2排出量の削減を実現する大型コンテナ船「NYK Super EcoShip 2030」のデザインも Garroni 氏によるものであります。

イタリアの躍動的な文明の史的背景には、イタリアという舞台で、ラテン/キリスト教文明、ギリシャ/ビザンチン文明、アラブ/イスラム文明という三大文明がぶつかり合い、そして融合し、イスラム社会において伝承されていた古代ギリシャ・ローマ文明の再発見がなされ、最終的にはボッティチェリの「ビーナスの誕生」に見られるような「人間讃歌」のヒューマニズムという普遍的な新しい価値観

を創造したダイナミズムがありました。その哲学的背景にはローマのキケロ以来のフーマニタース（教養・学問・良心・誠意・責任）の概念がありました。

一方、日本はユーラシア大陸東岸のターミナルアイランドで、文化・文明の発展過程で、概ね西からの影響を受けてきました。日本人の精神の古層に繰り返される通奏低音（Basso Ostinato）の伝統的美徳、即ち、天然との共存、生きとし生けるもの皆平等、ノブレスオブリージェ、恥の倫理、質実な生活観と労働観、労使の協調、高度の美意識等の上に西からの影響を日本化（Japanize）し、融合・調和して来た独特の文明史的体験を持っています。イタリアと同様、多元的なものを融合させる調和（Harmonization）の努力を通じ、感性を磨き、現場にこそ真理がある（細部にこそ神々は宿る。）という現場重視の実証主義的物づくり（技術力）の理念が生まれた訳です。

多元的なものが激しく衝突し、やがて調和、融合せんとする力が働き、ここに共通の普遍的価値が生まれ、共存していくという人類の革新的行動形式の典型です。現代の多元的グローバリゼーションの時代にも必要とする行動形式です。因みに日本最古の憲法は、1500年前に聖徳太子により制定された十七条憲法ですが、第一条に「和

を以て貴しと為す」とあります。

このように見ると、両国の文化的特性には、互いに共鳴し合えるものがあり、日本の現場真理主義の技術力と、イタリアの独創性を融合させれば、優れた「イノベーション」力を発揮できるものと思います。日伊両国の学術交流については、まさにこの点が求められるところです。

以上のような文明史的な大勢観察を踏まえて、経営についての基本的な私の考えを少し申し上げたいと思います。私は、経済と政治の最終的な目標は、道徳と文化を実現することにあると思っております。しかるにグローバリゼーションの進行した現代において、道徳的規律を基礎としない自由放任型の市場主義の横行、IT革命の「影の部分」としての Virtual Society の拡大、家族や地域社会の絆の弱体化等により、人間性を疎外する風潮が世界的に蔓延していると考えます。

今日の如く大変化の時代には、思考の上で基本に戻り、第一に的確な時代認識を持ち、第二に追求すべき価値を見定め、そして第三にその価値実現のために処方箋を作成し実行することです。

第二の価値については、先程来申し上げてきた両国の文明史的体

験からも、多元的なものを調和（Harmonization）し、融合する努力を重ね、相手を思いやる精神（Compassion）を高め、道徳的規律をもった市場主義を実践し、そして、家族と地域社会の絆を深めるといふ四つのしっかりした自覚が必要でしょう。そして、それらの価値を実現する為の処方箋としては、人々の生活の物心両面における質の改善、向上（Quality of Life）と雇用の確保と創造を図らねばなりません。それを支えるものは、日本の経営者が大事にしてきた人間性の尊重と長期的視野に立つ経営観であります。

人間性を尊重する社会の形成には、長期的に捉えれば、何といたっても教育が最重要課題として浮かび上がってきます。ボローニャに欧州最古の大学が誕生したとき、その使命は、その時代が求めた専門職業人（法学者・医師・聖職者）を養成する意図があったと聞きます。大学では、その専門教育に先立ち、リベラル・アーツたる自由7科目（算術、幾何、天文、音楽、文法、論理、修辞）の履修を前提としました。今日では人生のある時期だけ学べばことたりるということではなく、幼年期から高齢者まで社会全体が学習する社会（Learning Society）を実現し、社会の一員としての義務と責任と思いやりを果たす市民道（Citizenship）の確立を追求すべきでしょう。

このようにして、ダイナミックなルネッサンスの精神を機軸とし
科学/技術志向の協力と、教育/文化志向の協力を、あたかも車の両輪
として進め、人間性疎外の風潮を克服し、世界の新秩序の構築に向
けた Compassionate Partnership を築いていこうではありませんか。

ご清聴有難うございました。(Molte grazie モルテ グラッツィ
エ)